

第十四話

純素軍事純業討死事

『前太平記』上 卷第一 四十六頁から四十八頁より

[純素討手の跡を追う]

さて、純友の弟の春宮の権亮純素は、都のうわさを聞こうとするため、わざわざ都に残り、もし討手が下るならば、道で邪魔をして引き留めようと、三千人余りの手下をあちらこちらに潜ませておき、自分は都のうちでうろついて、忍び姿で歩

微服潜行して、

き、耳を壁にあて、人の心底を探り出そうとして、尋ね聞いていたが、少しばかり

心を人の胸に置きて、

将門に互いに回状をまわす事情があつて、過ぎ去った三月上旬から下総に下向し、いよいよ都に帰り上ることになって、尾張の熱田で話を聞くところによると、京都では、これこれのことで伊予国へ討手が下り都のうちは、思いもよらないうちに、

以ての外に

騒動の処置を下したので、「ああ、たいそうな大事に発展した。急いで摂津に下

騒動の由沙汰しければ、 「すは 由々敷き大事出で来たれ。

り、軍勢を集め、渡辺神崎で防ぎ止めよう」と思って、夜に日をまたいで急いだほどに、四月十七日、摂津国芥川につく。ここで話を聞くと、「討手の大将はすでに昨日渡辺から出船しなさる」と言うので、純素は「それでは仕方がない。後から追

「さては力無し。

いかけ、前後より挟んで包囲して攻撃をしよう」と言って、その軍勢八百人余りを

裏み討ちにせん」

集め、小船十艘余りに乗り込んで、もし万が一波にも汐にもひるむものなら、「走

波にも汐にも緩まばこそ、

れ者ども、押さないか者ども」と掛け声を出して、船を走らせたため、十九日の未明に讃岐国の箱の崎に到着した。ここで、軍勢の区分をし、取り決めを行って、十艘余りは陸に上がり、讃岐路を通過して、敵の背後に向かうのだった。

【純素淑方を破る】

さて、伊予守淑人は、戦前明石の者たちが、まだ戦わない前から、降伏を願い出たのを、もしかしたら、嘘をついてあとから攻めることもあるだろうと推し測って、舎弟の左衛門佐淑方を大将として、三百騎余りを分断して、三津の浜の民家数十軒を壊して、盾を並べて列を成し、浜の方には三町ほど、馬を走らせる場所を残

在家数十箇処を毀つて

搔楯に搔き、

浜面三町が程、

馬の駆け場を残し、

し、逆茂木を作って、嚴重にお守りになる。こうして、航路からの追手（純素）は

逆木引いてぞ 固めらる。

三津の浜から上がろうとしたが、この様子を見て、「さては、敵はここを守っていると見た。公家の連中がどれほどの実力であろうか。一人も道を知っている者がい

一人も案内知りたらん者あるまじければ、

ないだろうから、悪所難所で追い詰めをかけて、矢を打ち、切り捨てるようなこと

悪所難所に追い詰め追い詰め、 射伏せんは、

は、たいそう面白いだろう」と、多くの兵の気力を奮い立たせ、また軍勢を二手に

最興あるべし」

して、片方は三津の浜から向かい、純素の軍勢は、屈強な兵、百五十騎余りを選んで、港から二十町余り東にある漁師の通る細道から攻め寄せた。やがて、浜の方から戦が始まって、攻め寄せる軍勢の連中は、鬨の声を挙げるなどするが、同時に並べた盾の側まで攻め寄せて、喚き散らして戦った。防御する兵は百二十騎、弓の射手を整えて、ばらばらに打つ。戦闘はまだ決着がつかずにいたところ、東から回った百五十騎の兵が、想定外の横の方からどっと喚いて駆け出したので、淑方の先陣は前後の敵を防ぐことが難しく、驚き取り乱して、敗れてしまった。純素は勝って調子づいて、縦横無尽に駆け散らすこと、浜の方の攻め寄せる軍勢は、これに気力をもらって、勇み進んで戦った。淑方の軍勢は、防衛をする方法を失って、南を目指して引き返す。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

[純業討死、純素敗北]

さて、讃岐路から回った純素の弟八郎純業は、合図の時間を間違えまいと、昼夜を関係なく、急いだ。高縄城はすでに落城して、火をつけてあったのを、前方からの合戦が始まった合図の煙と考えると、人も馬も息を継がせたならば、揉み合いなが

人馬の息もつがせばこそ、

ら、かけていった。しかし、多くの兵の過半数は馬にも乗っていない。偶然乗っている者も皆、所々の宿駅の馬を奪い去って乗っている。何の役にも立たない。馬の脇腹を蹴っても走らず、鞭を打っても進まず、ただ一か所でだけ跳ねている

煽れども駆けず、

打てども進まず、

唯一所にのみ踊る心地して、

ような気がして、頼りにならなかったが、あれやこれやとして、二十一日の午の刻ほどに走って到着した。淑人は高縄城の焼け跡で陣の備えをかため、負傷者や捕虜

陣々を堅め、

にした数を記録し、首実検(老)をしていらっしやだったが、八郎純素の軍勢は三百五十騎が隙間もなく斬ってかかる。波多野右衛門の五百騎余りが合流して、これを防ぐ。もともと、純業は血気盛んな若武者で、その上戦は初心者である。射っても

然も軍は始めなり。

切っても役に立てないで、先陣に進んで戦ったが、誰が射ったともわからない、流れ矢に胸板を射ぬかれ、まっさかさまにどさっと落馬する。淑人の兵は勝って調子づき、勝気を得たうえ、皆騎馬の達人である。敵は長旅に疲れて、その上、徒歩であったので、心は勇猛に思えるが、騎馬の兵に掻き散らされて、むやみに我さきに

心は猛く思へども、 騎馬の兵に駆け立てられ、

と逃げていく。権亮純素は三津の浜の軍に勝って、すぐに淑人の本陣に押し入ろうと、旗を揺らめかせて進んできたが、逃げてくる味方に立ちはだかれ、思わず港へ引き返す。波多野が先陣となって軍を掻き乱し、一人も残すまいと勝鬨を挙げて追いかける。純素は馬を立て直し、「攻め返せ者ども」と指図したが、全く耳にも聞き入れず、負傷者も助けず、仲間を乗り越え、乗り越えていくように逃げ落ちてい

乗り越え乗り越え落ち行きける。

った。それゆえ、城下から三津の浜まで、二里の道の間、人馬は尚その上に重なっ

人馬弥が上に重なり死して、

て死んで、死体は積み重なっている（→死屍累々のありさまである）。はじめのこ

骸は積んで累々たり。

ろは、攻め寄せる軍勢八百人余りと噂されたが、たったの二十騎ほどになってしまった。純素は仕方なく三津の浜から小船に乗って、備前を目指して逃げ延びたのだった。

その後、あちらこちらに隠れじっとしていた賊徒どもは、ある者は逃げ去り、ある者は降参に出てきたが、淑人はこの者も罰することなく、仁愛をもって手懐けられた頃には、ひとまずは、少しの間、国中は平和になったのだった。さて、この淑人は武内宿禰十八代目の孫、紀長谷雄の次男で、代々詩文創作の家に生まれ、式部省の家臣に任じられ、儒業 (式) を仕事としなさるところ、今また戦に専念し、南海

儒業を事とし給ふに、 今又干戈を専らにし、

の凶賊をわずかな時間で攻め落としなされたので、世間は連れだって、その威光を

南海の凶賊を一時に攻め退け給ひしかば、 世挙つて 其威を仰ぎ、

敬い、その能力をほめたたえた。

其徳を称じき。

注釈

※壺・首実検……打ち取った敵の首がその名の人かどうか、大将自ら検査すること。

※式・儒業……儒家としての学問。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/6/18

改訂：2021/3

海熊童子

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

